

ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』に見る「現在」

09L038 Stefano Perversi

私は、「イギリス文学と歴史2」で取り上げられたジェーン・オースティン（以下、オースティン）の『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice* 1813年）について、作品と映画を鑑賞し、また主に田辺昌美の『ジェイン・オースティンの文学』を参考に、オースティンとその時代をストーリーの中に探っていく。オースティンの時代に重要であった、「紳士」であること、また19世紀初頭のイギリスという国にも触れたい。

作品のあらすじは、以下の通りである。舞台は18世紀末から19世紀初頭のイギリス、五人姉妹を抱えるベネット家ではそろそろ父も自分の老い先、特に娘たちの行く末を案じ始めていた。当時の規範では、息子のいないベネット家の住居を含む遺産は遠い従兄弟に相続される。娘たちに裕福な金持ちと結婚をして欲しいと急かす空気が漂う家であった。

そんな時、近くの邸宅を新しく借りることになった資産家のビングリー氏のことを母は知り、早速娘たちの相手探しのため、舞踏会開催の約束をする。そこにはビングリー氏の友人でさらに莫大な資産を持つダーシー氏も出席していた。そこでベネット家の次女、この作品の主人公でもあるエリザベスは彼と出会う。俗っぽく、洗練されていないとはいえ、自分が慣れ親しんだコミュニティと人々を軽蔑し、エリザベスの容貌を「そこそこ」に評価したダーシー氏の高慢発言を、エリザベスは「ムカッ」ときつつも笑顔でかわす。しかしながら、「そこそこ」と評価したものの、いつの間にかダーシーはそのユーモアと快活さに満ちたエリザベスの瞳に吸い込まれ、彼女に興味を持つようになる。だが、さすがのダーシーも格下の家のエリザベスとは、彼自身の気難しい性格もあるために打ち解ける事ができない。結婚は男性にとっても、妻の持参金で自分の財産を増やす好機であるため、軽率な恋愛、及び結婚をすることはできない。

その後も、ダーシー氏に反感を持つ、一見人当たりのよいハンサムなウィッカムという男性からの噂話などで、エリザベスは更にダーシーに反感を持つようになる。しかし、ある日、ダーシー氏はエリザベスへの気持ちが抑えきれず求婚する。「上から目線」の慥慥無礼な求婚に対し、彼に偏見を持っていたエリザベスは拒絶を示す。しかし徐々にダーシーに抱いていた自分の感情は偏見に縛られていたことにエリザベスは気づき、そしてダーシー氏も自分が高慢であったことを謝罪し、お互いに素晴らしい伴侶となる人だと気付いてゆく。お互いの恋愛のプロセスと結婚までの過程を描く古典的な恋愛ストーリーである。

この作品のキーワードは、タイトルにもずばり表れている格差社会の中での「高慢」と「偏見」、その間にある拮抗である。現在ではシンプルとも言える展開であるが、現在に至るまで何度も映像化され、読者を引きつける魅力はどこに隠れているであろうか。それはこの小説の、小さな村の顔見知りの家族の描写、そこに現れる新しい顔、読者から見て好ましいと感じる男女の恋愛と結婚までのプロセス。このようなシンプルなストーリーそのものが今も読者にアピールしていることは驚くに値する。冒頭の場面、五人姉妹の結婚相手探し、男女の出会いの場である舞踏会、気難しい性格ではあるが、背も高く、収入も高いダーシー氏の登場は、いまだに多くの女性読者にアピールするものと考えられる。

一方、このような一見、古風にも見える設定、ストーリーの中にも、私たちが身近に感じられる現象を見ることができる。ダーシー家とベネット家ほどではないにしても、社会的地位の格差の中にある緊張関

係、そこからくる苛立ち、また、言葉づかい、立ち居振る舞い、生活習慣の差異など、現在にも通じる問題をこの小説は含んでいる。また、小さなコミュニティにおける「噂」とその影響も興味深い。特に恋愛に関する噂はいつも人々の注目を集める。オースティンの描く「小さな村」は、実際にも、また象徴的な意味でも現代でも身近に見られるのである。特に人口が少ない村では噂話は頻繁に見られる。私自身、イタリアの人口20,000人足らずの村出身のため、イタリアに帰るたびに村人は私たちペルベルシ家について噂をする。そのため我々の履歴は村人の頭に克明に刻まれているのである。これは個人的で、具体的な例であるが、われわれは何らかのコミュニティに属しているため、この「小さな村」の感覚を共有していると言えるのではないだろうか。この作品の、噂から生まれる誤解や偏見は、「小さな村」のコミュニケーションにおける問題点を読者に見せ、彼らの共感を生んでいるのではないかと思われる。

授業で扱われたジェントルマン像がくっきりと見える作品でもあり、ただの地位と財産があるジェントルマンであるだけでは、真のジェントルマンとして認められていない。また、女性たちも彼らの財産だけではなく、人間の中身を見ようとしている印象がうかがえる。実際、作品の中でエリザベスはベネット家のコリンズ牧師との結婚を母から押されるが、コリンズ本人に耐えられないので、きっぱりと拒否する。このシーンから私たちは無理矢理人から押しつけられた結婚ではなく、自分のちゃんとした相手を探したい女性諸君のメッセージや、感情も描かれていることがわかる。もちろん女性だけでなく男性も好きな人と結婚したいものだ。

田辺昌美によると、他の『エマ』(Emma 1811年)などオースティンの他の作品と比べて、『高慢と偏見』は最もバランスが良く保たれている作品であるということである。他の作品と比べて田辺は「[他の作品に見られるような]ふざけ気分や、極端に対照的な悲恋の深刻さは姿を消して、失恋も結婚も喜劇も程よく、それぞれの形を与えられた形である」と述べている(田辺 p.68)。エリザベスとダーシー氏も、その出会いから、「恋」への発展、そしてゆっくりと二人の間の「愛」を形成していく過程が見られ、終盤にはエリザベスのダーシー氏に抱いていた偏見と嫌悪感、そこから発せられた罵倒も、ダーシー氏の一変した態度で許されていく。ここまでの道のりは簡単ではなく、いわゆる「どろどろした」部分も含んでいるが、読者はストーリーの展開について「ん～早く～」と恋愛の展開にサスペンスを感じて、読み進めていく。

エリザベスとダーシー氏の二人がお互いの偏見と高慢を反省し、最終的には和解し、結婚まで進んでいく。執拗に娘たちの良家との縁組を望む世俗的なベネット家の母親は、ダーシー氏の尊敬の念を得ることはできなかったし、彼女自身も人間的にはダーシー氏を好きになることはできなかった。最終的にはこの世俗的な母の思惑通り、長女のジェーン、次女のエリザベスは、彼女たちの家族より遥かに多くの資産を持つ伴侶を見つけ、「玉の輿」に乗ることになったのはある意味、皮肉めいてもいる。しかしながら、ベネット家の母親が結婚における財産の重要性を強調している一方、この娘たちは、愛し合って結婚に至ったという理想を示していて、愛と結婚を結び付けたロマンティック・ラブ・ストーリーは19世紀から現代に至るまで、多くの女性読者をときめかせている。

これまで、この作品が女性読者にアピールしている点について述べてきた。実際に、非常に女性的な作品として位置づけられているらしく、図書館で『高慢と偏見』とオースティンの文学に関連する本を借りたときに、図書館の司書の方は「ジェーン・オースティン？女性向けだよな？」と、男性である私がなぜ借りるのかと驚いていた様子だった。だが、そこでわたしは、一抹の恥ずかしさを感じながらも、「だからこそおもしろいんです」と答えた。実際、「女性向け」と思われている作品を男性側の視点で解釈するのは、このレポートを読む人にとっても面白いのではないかと考えた。その司書の方は「なるほど～」と言い、納得していた。恋愛における「どろどろした」部分も描かれて、男として、ダーシー氏みたいな

気難しい人間にはなりたくないとも思うが、作品全体としては、確かに多くの女性が好みそうなストーリーであったと感じられた。

オースティンについては、前述の田辺によると、「政治や宗教などの社会背景よりも、ただ、正しい生き方とはどこにあるのか」を探求する作品を残したと紹介されている（田辺 p.1）。17歳で最初の作品を書いた少女にとって、成長すると共に世界観が変わっていくので、本の書き方なども変わるのは当然だ。田辺は、オースティンを「天才だ！」と崇め、熱狂的なオースティン崇拝者と感じられたが、では、「人間はいつも変わっているので永遠に新しい！」とオースティンの言葉を紹介している（田辺 p.10）。オースティンが現在の世の中を見たら、19世紀初頭のイギリスと比べて、天地がひっくり返ったような違いを感じるに違いない。良きにつき、悪しきにつけ、1日1日によって人間は変わっていき、永遠に新しい生き方を捜し求め、進んで行く。一方、すてきな出会い、すてきな恋愛、すてきなパートナーの獲得、とオースティンの描いた価値が変わらずに支持を得ている点は興味深い。このように広い視野で人間の変遷を考えると、私は自分の心が広がっていくように感じた。『高慢と偏見』については、2006年に映画で見たが、再び作品を読み直して、最初に見たときよりも短時間で一気に深くまで入りこみ、自分でも書いていて楽しいレポートになった。

参考文献・映像

オースティン、ジェーン、中野康司訳。『高慢と偏見』(Pride and Prejudice 1813 上・下) ちくま文庫、2003年。
『プライドと偏見』 監督 ジョー・ライト、制作会社、スタジオカナル、ワーキングタイトル・フィルムズ、2006年。
田辺昌美 『ジェイン・オースティンの文学』あぼとん社、1965年。

(担当教員 杉村使乃)